

照葉狂言（泉鏡花）

明治十年代の北陸金澤、藝妓屋げいぎの倅せがれの少年貢みつぐは母に死なれ孤兒となつて伯母と共に暮してゐたが、博打好きの伯母はさつぱり面倒を見てくれない。それでも、貢が「廣岡の姉上」と慕ふ隣家の娘が可愛がつてくれるのが慰めだつたが、或日、花札賭博で伯母が捕まり、貢は寄邊よるべを無くして了ふ。だが、結局、小親こぢかといふ名の旅回りの美しい女能樂師に拾はれる。小親は見世物小屋で仙冠者牛若の役を演じ、貢はその演技に陶醉して何度も觀に通つてゐたし、小親も可愛らしい貢を憎からず思つてゐたのである。

貢は故郷を離れ小親の狂言一座で養はれながら藝を仕込まれ、一端いっぽの座員となつて八年ぶりに金澤に戻つてみると、洪水が因で古里の様子は一變してゐた。廣岡の姉上も不幸な境遇に陥つてをり、貢は小親の助けを借りて救つてやりたいと思ふ一方、小親に犠牲を強ひる事になるのを恐れて思ひ悩む。だが、さういふ貢の苦惱よりも、寧ろ作品の眞の妙味は、小親を通じて

描かれる、作者鏡花の愛惜して已まない人間像の描寫にある。日夏耿之介の云ふ様に、鏡花は旅回りの女藝人なんぞといふ「遊里の遊女に、不良女子の成り行きを見ず」、「うつくしい人情の美所を觀取する」のであつて、彼の「たましひを打ち込ませるもの」は「泥中の花はちすのやうにすんなり育つた人間の姿」、その「たましひの形象」に他ならなかつたからである。

貢が小親の演技を觀に見世物小屋に通つてゐた頃の或日、土族の倅で亂暴者の國曆も觀に來てゐて、貢が小親に借りた縮緬の座蒲團に坐つてゐるのに因縁をつけ、貴様の家は「藝妓屋ぢやないか。藝妓も乞食も同一だい。だから乞食の蒲團になんか坐るんだ」と罵り、小親に對しても「年増の癖に、ふむ、赤ン坊に惚れやがつたい」と毒づく、小親は凜として啞呵を切る。「他のお客様にはどうであらうと、この坊ちやんだけにや飽かしたくない。退屈をさしたくない、(中略)打ち通すあひだ來ていただきたい、おもしろう見せてあげたいと、さう思つたがどうしました。ほんたうに藝人冥利、かういふ御蟲貞を大事にするは當前でござんせんか」。

そして實際、小親が「一たび舞臺に立たむか」、その「輕き身の働、躍れば地に褌を着けず、舞の袖の飜るは、宙に羽衣懸ると見ゆ」といふやうな見事な舞姿だつたのである。だ

が、小親の藝の師匠の小六は「をさなきより、刻苦くくして舞を修めし女」で、「江戸なる家元の達人と較べて何か劣るべき」名手だつたが、リユーマチで身體が利かなくなると、哀れにも白い肌を曝して「觀世物の磔はりつけ」に懸かるべく賣られて行つた。今や小親もリユーマチを患ひ始めてゐるし、借金も嵩かさんでゐる。けれども、「樂しき境遇にはあらざれど、小親はいつも樂しげ」で、貢を心底可愛がり、廣岡の姉上の苦境を聞くと、己が身を賣つても貢の願ひを叶へてやうとするのであつた。

「ロダンやトルストイのおせわにならないことを私はほんたうに喜んで居る」と鏡花は書いた事があるが、實際、鏡花の作品には西洋の感化は全くない。西洋への無知ゆゑに鏡花は蔑視される事もあつたといふが、彼は生なかの西洋學問なんぞに色目を遣はず、徳川の世の名残りが色濃く漂ふ社會に蠢うごく日本人の「たましひの形象」を好んで描かうとした。そこには、松原正の云ふ「西洋人でも日本人でもない別種の人種」、「中途半端な化物」なんぞは存在しないし、何よりも、實に詩情豊かな文章がある。日本に生れながら鏡花を讀まないのは「折角の日本人たる特權を拋棄してゐるやうなものだ」と中島敦は云つてゐる。

(一泉鏡花集成三、ちくま文庫)